

(6) 高梨子森下遺跡18号住居跡にみられる貯蔵穴脇の石敷について

18号住居跡は古墳時代中期の竪穴住居跡である。規模は8.65m×8.10mを測り、本遺跡で最大である。東壁の北寄りに構築されたカマドは、本遺跡で最も古いカマドである。住居壁は東西南北方向に沿っている。南東隅には1.3m×1.2mの隅丸方形を呈する土坑があり、貯蔵穴と考えられる。深さ74cmである。貯蔵穴の西脇には、床面直上の120cm×75cmの範囲内に小石が敷き詰められていた。さらにカマドの左手前には、88cm×75cmの楕円形を呈する小土坑があり、深さ18cmの底面には、貯蔵穴脇と同種の小石が敷き詰められていた。ここでは貯蔵穴脇の石敷について、類例の集成が不十分であるが、簡単な比較・検討を行う(第75図)。

①東京都日野市平山遺跡第4号住居跡 5.4m×5.2m規模の住居南西隅に、短辺90cm、深さ40cmの貯蔵穴があり、貯蔵穴の東脇に40×80cmの範囲に小砂利が分布する。主柱穴を結ぶ線上の床下にL字状の集石がある。時期は古墳時代前期である。

②埼玉県本庄市九反田遺跡1号住居跡 溝を挟んで存在する二つの住居群の一方に属し、住居群における最大の住居である。時期は古墳時代中期である。住居は7.09m×7.49mの隅丸方形を呈し、軸は東西南北に沿っている。カマドはなく、地床炉が2基ないし3基検出されている。住居の南西隅に、住居壁とは軸方位を離れた貯蔵穴が存在する。貯蔵穴は一辺約1.05mの方形を呈し、下部は径72cmの円筒状を呈する。住居は焼失しており、貯蔵穴上には蓋板とみられる炭化材が検出された。貯蔵穴の東脇に石敷があり、半円形のプランとされている。住居南東部の主柱穴周辺には土製勾玉・土製管玉が2か所にまとまって出土している。

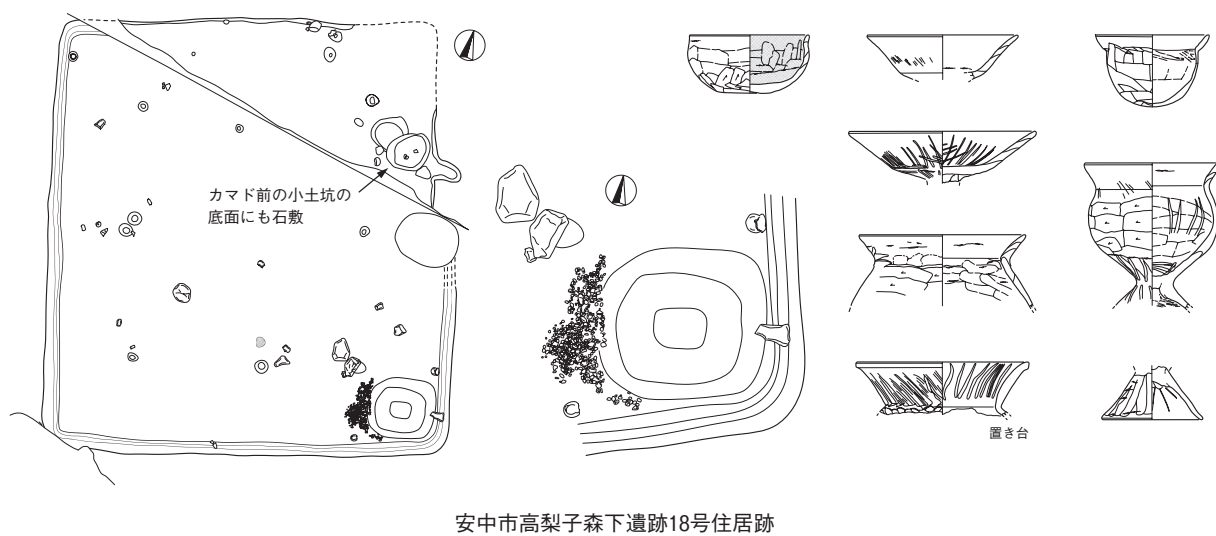
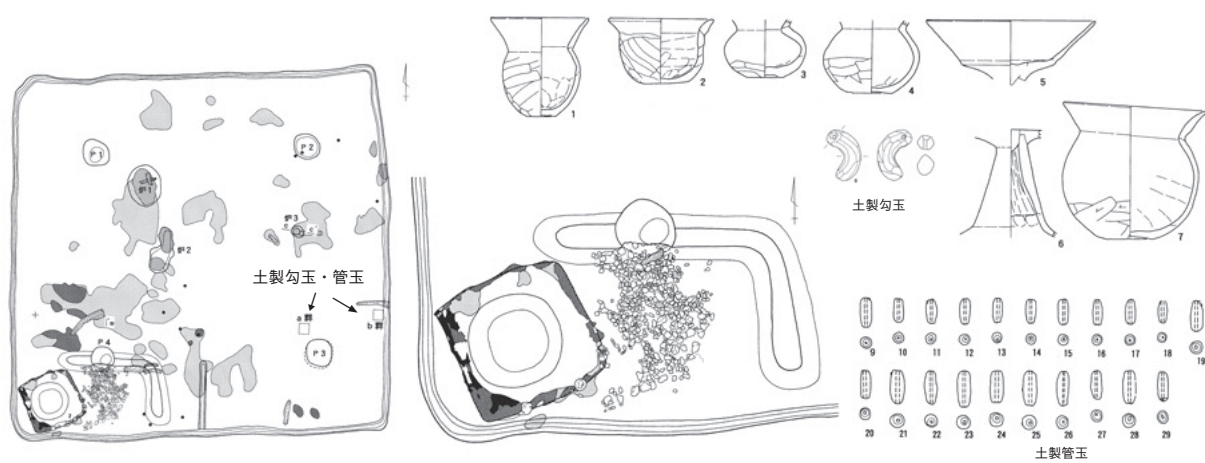
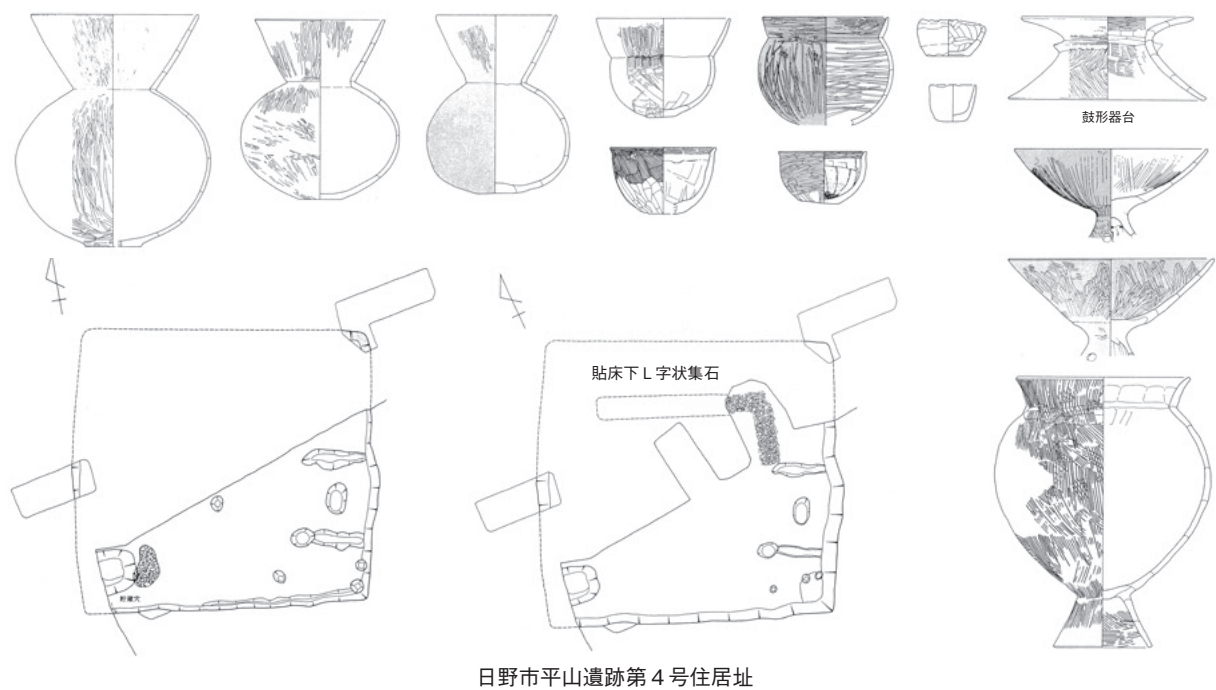
②の事例は、大型住居であることや貯蔵穴の形状・規模、石敷の形状などに18号住居跡との共通点が多い。貯蔵穴の位置に南西・南東の違いがあるが、住居の出入り口を南壁中央に想定すれば、出入り口側に石敷を設ける点ではその違いも解消される。主要な差異は、②はカマドがなく、炉をもつことである。②は高坏や埴の特徴から5世紀前半と考えられる。本遺跡18号住居跡は埴が欠落し、埴が1点だけ出土しており、②に後出する、5世紀後半でも古い段階に位置づけられる。カマドの有無は時期的な差と捉えられる。安中市域で最古段階のカマドと位置づけられる18号住居跡が、他地域の遺跡と酷似する特殊な貯蔵穴を有することは、当地域へのカマド導入期における地域間関係を検討する好資料となろう。

貯蔵穴が貯水施設であるとする考えに立てば、貯蔵穴脇の石敷は、貯蔵穴内の水に対して清浄な空間を醸成するための施設であった可能性が考えられる。古墳時代の井泉や導水施設に石敷がみられる事例は多く、水に関わる祭祀と石敷との関係性は深い。貯蔵穴脇の石敷と水に関わる祭祀との関連も十分に考えらる。18号住居跡や②の事例は、大型住居跡であることや土製勾玉・管玉の出土を加味すれば、その祭祀的性格がより鮮明になろう。②の石敷を仔細にみれば、多角形のプランとも考えられ、これは三ッ寺I遺跡における豪族居館内の石敷遺構との類似が指摘される。石敷のプランは、水に関わる祭祀のあり方を探る重要な要素になると考えられる。石敷の精緻なプラン検出が求められるところである。

①のような古墳時代前期の事例は東京、埼玉地域に比較的多いとされるが、壇状になるなどの違いから、古墳時代中期の事例と同列に扱ってよいか判断できなかった。貯蔵穴脇の石敷について、現状では、古墳時代中期の大型住居にみられる、水の祭祀に関わる施設と位置づけておきたい。なお、18号住居跡でみられたカマド前の小土坑の石敷とカマドの関係については、今回は検討できておらず、今後の課題としたい。

参考文献

- 清野 利明他 1986『平山遺跡－第13次調査』日野市遺跡調査会
下条 正他 1988『三ッ寺I遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団他
小倉 均 1990『弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構の研究』『埼玉考古 第27号』埼玉考古学会
松本 完 2004『九反田(Ⅲ次調査)・観音塚(Ⅲ次調査)』本庄市教育委員会



第75図 石敷を伴う貯蔵穴（住居1／150、貯蔵穴1／60、遺物1／8）